

# 魚類防疫対策指導

宇野悦央, 辻村明夫, 見奈美輝彦

平成5年1月から12月までの病害検査件数は計141件であり、内訳はアユ133件、アマゴ5件（細菌性疾病2、イクチオホヌス症1、ギロダクチルス症1、不明1）、コイ2件（水カビ病）およびサクラマス1件（不明）であった。

表1 養殖アユの病害検査状況

病名 / 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
ビブリオ病		2 (2)	7 (6)	1 (1)	1 (1)	2 (2)	1 (1)					1 (1)	15*1 (14) [9]*2
連鎖球菌症									2 (1)				2 (1) [1]
冷水病	6 (4)	8 (5)	8 (5)	6 (4)	3 (3)	5 (4)	11 (8)	2 (2)		4 (3)		5 (5)	58 (43) [16]
シュードモナス病		1 (1)					4 (3)					1 (1)	6 (5) [5]
細菌性鰓病	1 (1)	3 (2)	4 (2)	3 (3)		1 (1)							12 (9) [6]
その他の細菌性疾病						1 (1)							1 (1) [1]
混合感染症							1 (1)						1 (1) [1]
冷水病+シュードモナス病							1 (1)	1 (1)	1 (1)				3 (3) [3]
冷水病+ビブリオ病													
真菌症	1 (1)	2 (2)	2 (2)	2 (2)	3 (3)	2 (1)	2 (2)					1 (1)	15 (14) [7]
寄生虫性疾病				2 (1)		1 (1)		1 (1)		1 (1)			5 (4) [3]
その他							1 (1)						1 (1) [1]
不明	1 (1)	1 (1)	1 (1)	4 (4)	1 (1)		1 (1)		2 (2)	3 (2)			14 (13) [6]
計	9 (7)	17 (13)	22 (16)	18 (15)	8 (8)	13 (11)	22 (18)	4 (4)	4 (3)	8 (6)	0	8 (8)	133 (109) [19]

\*1 件数 \*2 ( ) 経営体数, [ ] 同実数

養殖アユの病害検査状況を表1に示した。ビブリオ病は15件（9経営体）で、そのうち、*Vibrio anguillarum* の血清型A型によるものが7件、同C型によるものが8件で、いずれも前年より多かった。また、冷水病との混合感染症が6～8月に1件ずつみられた。分離された*V.anguillarum* 15株の薬剤感受性を表2,3に示した。血清型A型はオキシリン酸に対して6月末以降感受性の低下がみられ、スルファモノトキシンとオルメトプリムの配合剤に対しても感受性のやや低い株がみられた。血清型C型はオキシリン酸に対して高い感受性を示したが、スルファモノトキシンとオルメトプリムの配合剤に対しては感受性のやや低い株が多かった。連鎖球菌症は9月に2件（1経営体）であった。冷水病は58件（16経営体）で全

表2 ビブリオ病菌の薬剤感受性

No.	分離月.日	血清型	SO* <sup>1</sup>	OA* <sup>2</sup>
1	2. 16	C	2+	3+
2	2. 23	C	3+	3+
3	3. 4	C	3+	3+
4	3. 9	C	2+	3+
5	3. 9	C	2+	3+
6	3. 21	C	3+	3+
7	3. 25	A	2+	3+
8	3. 29	C	3+	3+
9	3. 29	A	3+	3+
10	5. 7	A	3+	3+
11	6. 25	A	3+	3+
12	6. 29	A	3+	2+
13	7. 27	A	3+	3+
14	8. 18	A	2+	1+
15	12. 27	A	3+	2+

\*1 スルファモノメトキシンおよび  
オルメトプリムの配合剤

\*2 オキシリン酸

表3 ビブリオ病菌薬剤感受性の類別

薬 剤		血 清 型		計
SO	OA	A 型	C 型	
3+	3+	4	4	8*
3+	2+	2		2
2+	3+	1	3	4
2+	1+	1		1
計		8	7	15

\* 菌株数

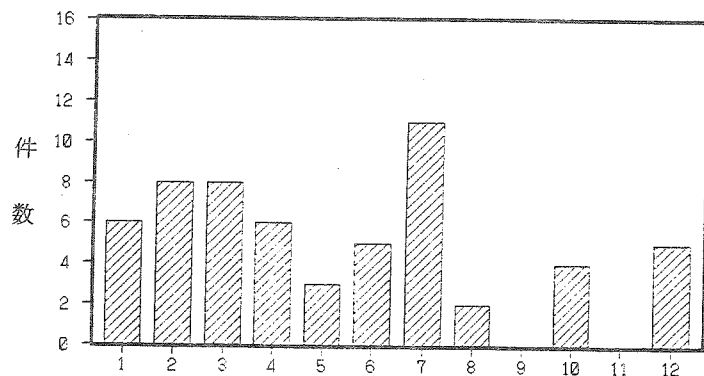


図1 冷水病の月別検査件数の推移

体の44%を占め、養殖アユで最も多い疾病となっている。冷水病の月別検査件数の推移を図1に示した。冷水病は4月頃まで多く、5月から減少傾向となるものの、7月は湖産種苗の導入時期でもあり多かった。各月の全件数に対する冷水病の検査割合は、早期の湖産種苗を導入する12月と翌1月で高かった。シュードモナス病は前年(23件, 9経営体)よりかなり少く、6件(5経営体)みられた。細菌性鰓病は2~4月に多く12件(6経営体)であった。真菌症は15件(7経営体)で前年(30件, 8経営体)より減少し、内訳は水カビ病14件、内蔵真菌症1件であった。寄生虫性疾病は5件(3経営体)で、内訳はギロダクチルス症3件、グルゲア症1件、その他の寄生虫性疾病1件であった。その他は1件で過食によると思われるものであった。また、不明は14件で、鰓蓋下部の出血を伴う症状のものが多かった。

以上のように、平成5年は19経営体（延べ109経営体）において133件の発生がみられ、疾病別では冷水病の割合が非常に高かった。

魚類防疫対策事業に係る防疫会議は11月26日（白浜町）に、魚病講習会は12月2日（桃山町）に、また養殖魚巡回健康診断及び防疫対策定期パトロールは平成5年4月から平成6年3月までに計32回実施した。養殖アユを対象とした医薬品残留検査は7～8月にオキシリン酸30検体について行い、すべて残留は認められなかった。